

前川佐美雄編輯

# 日本歌人

二月號

第二卷 第二號

日本歌人女流十二人集(賣切)  
歌集 朝の杉 B6二百頁  
送料十八圓

齋藤 史・川部みしほ・梁 雅子  
齋藤富海子・山村 貴美・山崎 雪子  
辰巳 和子・金子 千鶴・笹倉 道枝  
片山 恒美・宮崎 智恵・前川 緑  
右十二人の新作八十首づつを収む。日本歌人が如何なる女流を擁しつつかは本集によつて一目瞭然。女流歌壇の新風の淵源はここに見られる。  
京都・國際文化協會出版部

堀内民一著(新刊)  
歌集 はるかなる想ひ B6百六十頁  
送料十八圓

釋道空門より出でて「日本歌人」の新風に入る。その作風は道空のよき面を繼承すると同時に「日本歌人」のよき面をも攝取して、又一つの新しき風をなす。  
題字 武田祐吉博士  
序文 前川佐美雄  
京都・白井書房

日本歌人新選十二人集(最新刊)  
歌集 高踏集 B6二百頁  
送料十八圓

東 博・船津礎次郎・玉井 照子  
平光 善久・平井 惠美・塚本 邦雄  
山口 實・池田 道夫・赤松千都子  
大和 克子・井上 周・山内 敬一  
右十二人の新作八十首づつを収む。日本歌人には如何なる新人が育ちつつあるか、二十代三十代の最も有能の作家の登場、歌界に又新風を喚起するところなり。  
京都・國際文化協會出版部

日本歌人十五人集(最新刊)

歌集 新説 B6二百五十頁  
送料二十圓

前川佐美雄・田中 武彦・見原 文月  
廣川 親義・古川 政記・山本 保  
藤田 啾漣・大塚 延代・吉村 長夫  
山崎 幸夫・三浦 良一・佐伯 勝廣  
土屋 忠司・堀内 民一・關 登久也  
右十五人の新作八十首づつを納む。  
日本歌人の新風はこれと續刊の續十五人集、及び女流の「朝の杉」によつて完全に理解される。  
京都・國際文化協會出版部

梁 雅子著(新刊)

歌集 うづまき B6百五十頁  
送料十二圓

この歌集は今の歌壇のどこに出しても恥づかしからぬもの、女流歌人の誰人にも劣るものでないといふことを信ずるのみならずその歌風は「日本歌人」の女流の中にあつても斬新であり、且つ眞實である。新作四百首を収む。  
序文 前川佐美雄  
京都・國際文化協會出版部

現代短歌鑑賞 全三卷

各卷B6判二五〇頁  
定價各一五〇圓(送料一八圓)

與謝野 寛(木俣修)  
九條 武子(高藤史)  
釋 空(宮 柁)  
金 子(松田常憲)  
落合 直吉(高安國世)  
中 村 憲直(五島 茂)  
岡 村 順吉(前川佐美雄)  
川 井 千夫(鹿兒島壽藏)  
吉 左 夫  
伊 藤 左 夫  
東京・第一書房

日本歌人 第二卷 第二號 昭和二十六年一月二十五日印刷  
昭和二十六年二月一日發行 (毎月一回一日發行)

日本歌人 第二卷 第二號 昭和二十六年一月二十五日印刷  
昭和二十六年二月一日發行 (毎月一回一日發行)

(定價六十圓)

二月號目次

作 品 其 一	前川佐美雄・古川 政記・堀内 民一・堀内 小花・山崎 幸夫 東 博・藤田 啖連・佐伯 勝廣・吉田 智朗・山本 保 片山 謙二・土屋 忠司・關 登久也・田中 武彦・等	三
作 品 其 二	齋藤 史・宮崎 智恵・片山 恒美・齋藤富海子・金子 千鶴 千々岩好子・山崎 雪子・山村 貴美・川邨みしほ・梁 雅子 前川 縁・等	八
作 歌 餘 録 (二)	前川佐美雄	一二
寧樂座談會 (二)	前川佐美雄	一四
作 品 其 三	見原文月 新 村 出 吉 井 勇	二七 二八 二九
山 々 (作品三十首)	見原文月	二七
歌 書 記 念 會 にお くる	新 村 出	二八
讚 歌 四 章	吉 井 勇	二九
日 本 歌 人 歌 書 出 版 記 念 會	吉 井 勇	三〇
觀 寒 牡 丹 花 歌 會 記	吉 井 勇	三一
作 品 其 四	同人十二人	四〇
前 月 作 品 合 評	同人十二人	四〇
雜 記	前川佐美雄	四五
後 記	前川佐美雄	四五

作 品

其 一

○ 前川佐美雄  
はづるなく身の貧窮をうつたへて戦後學者が年越さんとす  
ゆくりなく世にも美しき少女子をわが見たりしかわが今日の幸  
死にぎははかくあるべしと氷雲照る冬空の虹に眼を細めたり  
逃げぎはに吾をぬすみ見し雌鼠の青ざめはてたるごぶ鼠らし

○ 古川 政 記  
戦亂の果に二つの命ありこの澄める山の岩上にあり(磐梯山)  
眼の下に眼路の限りなべて雲雪原と思ふ雲の耀き  
友ゆるに子ゆるにいまは泣かねども叫ぶより悲し雲の耀き  
薄氷張る危さに聞き入れれば八千の命闇にありけり  
戦ひの酸鼻まぢかく迫る日に散りたる花を恐れつつ見る  
山茶花は凍土をいろどり散り敷げばわれ生骸を愧かしみけり  
子が問へば死したる後や河流れ茫々と流れ邊も果もなき

○ 堀内 民 一  
ふたかみの雪のみ寺の寒牡丹ひとと倚り見む雪の底より  
遠世びとかゝるしづけき山の寺の牡丹花を見す雪の底より  
雪ふれば山のみ寺の楹にひとを佇たしむ紅き牡丹花  
雪ふりて山は遠世のしづけきにかへりゆくらしひとかなしも

○ 堀内 小花  
梅林に懐手してゆるやかにパイプくゆらす人は案外瀟灑  
寒ぼらの紡錘形に太れるを指に壓して新鮮度を見る  
猫柳を提げてくるりと背中むけ能の姫の如く妻佇つ  
新調の蝙蝠傘を部屋にひろげ子の無き夫婦ほればれしあふ  
瓶に挿す水仙にさへ採手する財を築きし人の習性  
空出しのパンに玻璃の壘れるを今日の朝戸出の祝福とする  
春泥に眼鏡はづして近視なる街娼は姉の如くやさしき

○ 東 博  
すがれたる心に添ひて入間野や秋も末なる小手指の道  
薄野を分けて行手は小手指の陽も鈍色の空の下なり  
ひと色の黄に朽ちはてし病葉に陽もとどかねばうら瀝りする  
冬近き入間郡の果を來て行きもかねたるわくら葉の道

○ 山崎 幸 夫  
悠久のひかり湛ふる青色はすでに悲哀を沈めて深し  
紫はけたかくあれど安からず春の夜霧のうつり流るを  
健かに縁は内にもりあがり小鳥の卵生るる思ひす  
濃き赤の輝くときは人の代のものの極みにたぎつを思ふ

○ 藤田 啖 連  
すでにして夢聲の髪に霜おけりわが雷遊が消息は知らず  
世界圖の上にいづれば小さき國朝鮮よ二つに分るゝ勿れ  
白鷺の二羽が下りたつ夕暮れの田居静かなり一羽は舞ひて  
既戸の皇子が先生慧慈が國高句置の道秋寂びにけり

指先をかすめる白し煙のむねに焦立せて流るる音も聞なし  
花ならず風船ならずもり上るスパンコールの二つのかなしみ

行きあひてあきつしばしば言たつる待宵草咲く土手の風の中

前川 佐美雄  
吉村 正一郎  
保田 與重郎  
亀井 勝一郎

實利につきたがるといふこと  
保田 現在では、生活に一番必要なものから

来る科學、それは戦争に關係してあますがね。一番神秘的な學問は天文學原子科學、でも宇宙は餘りに遠大で誰もさう關心を持ちません。天文學に興味を持たないのは戦争に關係がないから。さういふ風な學問に興味を持つたら世の中は變りますよ。若し有能な人で、さういふやうな興味を持つ人があつたら、黙つてゐるのはよくない。どこからかやるやうにしないといけないと思ふ。

吉村 貝塚君(茂樹)のやうな人は、亀の甲の研究なんかをやつてゐますがね、彼は金持だからやれるのだ。

前川 金持でも今はみな實利につきたがるから、そんな亀の甲の研究をするやうな人は

無い。地味といふか無駄といふか、世間から見て無意味だと思はれることに情熱を注ぐ人は減つてしまつた。

吉村 そりや素人が見ても面白いですよ。亀の甲のひびだとか何とか、それは面白からうが、それを悠々とやつてゐるわけに行かん。亀の甲を土の中から掘出したやうなもの程少しも可笑しくないんだ。さうかなあと思ふんだ。けどもね。

亀井 さういふことをする人が實にあないね。保田 それを打ち開かんといかん。然し魅力がありますな。自動車に乗る魅力より、そつちの方がよほど大きい。

前川 歌をやるものの中には、極く稀だが、そんな思ひを心に秘めてやつてゐる人もないわけではない。しかし破れますね、破れ

ないやうな世の中とならなくては。

無くなつた理想的人間像

吉村 いつかアカハタがね、小學校の子供に崇拜する人物を書かしてゐたね。よくは覚えてゐないけど、藝術家を擧げてゐるのは一人もゐなかつた。湯川や徳球はあつたし天皇もあつた。その他ルーズベルトやトルーマンやスターリンがあつたが、藝術家はなかつたと思ふね。子供の頃に反映して來るもので藝術家の間像はないのだね。

保田 昔はどうだつたですか。子供つてどの位ですか。

吉村 小學校の五年か六年ぐらゐ。

亀井 五六年だつたら昔だつて藝術家など言

はなかつたね。やはり大將か政治家でせう。保田 昔と今とは色々條件が變つて來てゐるから、藝術家もあつてよいのだからね。

吉村 吉屋信子とか菊池寛とかはないね。

保田 僕らの子供の時なら活動寫眞の俳優はあつたかも知れん。しかし大抵大將になると言つた。

吉村 さうさう野球の選手があつた。

前川 軍人は？

吉村 マツカーサー元帥はあつたが、日本の軍人は一人もない。

前川 うちの子供は自動車や電車の運轉手になりたいと言つてゐるよ、このごろ頻りに大工になりたいとも言つてゐる、僕も子供の時大工にならうと思つたことがあつた。まあとにかく理想的人間像といふのがなくなつたので、てんでばらばらと言ふわけかな。

亀井 戦争迄はあつたからね、二宮尊徳とか楠木正成とか、乃木大將とかとにかく青少年が生きてゆく上での理想的な人間があつた。それがもうなくなつた。問題だよ。

人格の力

保田 話がちがふが、書畫骨董の方では、軍人政治家のものはがた落ちださうだが、乃木大將のものだけは落ちないさうだ。東郷さんよりは上だと言つてますね。字ももうま

吉村 そりやどうしてかね。やはり人格？  
保田 人格でせう。

亀井 アメリカ人も褒めてゐるからね。何といふアメリカ人だつたけな。日露戦争に従軍した記者がゐますね。乃木さんにあつて古典的なギリシヤびとにあつたやうな氣がしたと言ふんだ。

前川 それに最後がやはり立派だと思ふね。色々言ふものもあらうが、あはは行かないもの。

保田 東郷元帥なんか餘り面白くない。

前川 東郷さんは運のいい人だ。たまたま勝つたのかも知れないしね。

保田 乃木さんは一生かかつて君恩に報いた歌だつてなかなか巧いがある。

亀井 文句もい。

吉村 文學的のところだね。ロンドンタイムズの記者だつたか、乃木さんのことを書いた本があるが、乃木さんは文學的で人間もよいが、文學的虚榮心があると書いてあつたね。新聞記者が褒めると大變御機嫌がよかつたさうだ。褒められたら喜ぶところは面白いね。東郷さんは字が悪い。

前川 しかし軍人として乃木さんはどうかな  
吉村 まあ軍人としたら餘り有能な人物ぢやないね。戦争をさせたら負けるし、兒玉大將に叱られたりしてね。

前川 漢詩ほどの程度かな。  
吉村 どれ程うまいのか知らんけど、藤澤桓

夫君のおぢいさんは割合にうまいと言つてゐるね。だからかなりうまいんぢやないかね。

保田 武人でも昔はみな風流だつた。

前川 漢詩の翻譯と和歌の翻譯とどつちがむづかしからうか。

吉村 そりや和歌の方がむづかしいだらう。

前川 しかし現代の歌だつたら案外やさしいのではないかな。すべてが寫實的だし、はつきりしてゐるもの。そのかはり面白くないにきまつてゐる。

吉村 うん。これ何やて西洋人は言ふだらうな。ただごと歌だもの。

前川 しかし古今新古今集あたりの歌を翻譯したら面白いと言ふだらうな。尤も翻譯はむづかしいし、簡單には行くまいけれど、たとへば、ほととぎす鳴くや五月のあやめ草なんて歌は、翻譯したら面白さうだ。

亀井 長く翻譯したらいいぢやないの。詩み

保田 あれはしかし翻譯も出來ないし、文章にも書けないね。十枚に書いても歌の方が勝つてきまつてる。よい歌でそんなものでしよう。しかし今の歌は出來るでせう。翻譯の出來ない歌を作つてゐた時代と、出來る時代と兩方ある。

前川 「春の夜の夢の浮橋とだえて峰にわ  
かるる横雲の空」といふ歌があるでせう。  
これなんか翻譯は先づ不可能だらうな。小  
島吉雄さんがこの歌の解釋に七八十頁ほど  
費してゐたが、結局解釋は出来ないと書い  
てゐたのを讀んだが、これは正直なところ  
だと思つたね。

吉村 翻譯の出来ない歌がよくつて、出来る  
歌がつまらんといいふところに大きな問題が  
あるね。日本の文學として。しかしさつき  
の自動車の歌なんか翻譯したら益々面白  
くない歌文になるだけだ。  
赤彦の上に出よ

保田 しかし同じ時代でもなかなか偉いこと  
を言ふ人もある。とにかく今は赤彦の考へ  
てゐたことの上へ出ないことには駄目です  
單に技巧だけではあつたものの上  
へは出られんですからな。

前川 そりや茂吉と赤彦とは大分ちがふから  
な。態度だけでも赤彦で挺子でも動かぬと  
いふところがありますからね。それにして  
もこんな時代では秋水のやうな、あんな風  
な歌人はもう出ないでせうな。  
保田 出ないといふことはないでせう。その  
氣になつたら出ると思ふな。今の歌は餘り  
見てゐないから分らんけど、しかし誰です  
か、終戦後よく詠まれる歌集は。

龜井 うん、あれはうまい、面白いね。  
前川 前の日先の町長さんもうまかつた。  
保田 さう、清水比庵氏ね、あれもうまい。  
吉村 何故長歌を作らないか  
保田 あれはどういふわけかな、長歌を作ら  
なくなつたのは。  
保田 歌合はせといふやうなものも影響した  
んでせうね。  
吉村 明治以來は新体詩に移行したといふこ  
ともあるね、一つは息がつづかないことも  
あるだらう。昔の人は何分か水にもぐつて  
息をとめる様な練習だつてしたといふから  
ね。  
前川 理由は色々あるだらうが、結局短いの  
の方が精神の集中が可能だからね。なる  
べく無駄を省くといふやうなことも。しか  
し長歌を作つてやらうかと思つてゐるので  
すがね。それより龜井さん、あなた長歌集  
を出すといふね。  
龜井 そのうちに出すよ。  
吉村 あなたは短歌は作らないの。  
龜井 長歌しか出来なないね。  
前川 短歌と言葉の暴力  
前川 とにかくここにゐる人は皆歌を作るか  
ら皆んな歌集を出したらしい。その方が専  
門歌人の集よりは面白いと思ふ。ただね、  
短歌はやはり古い革袋でせう。新しい酒を

前川 終戦後しばらくは吉井勇、齋藤茂吉、  
それに釋道空といふところでしたわ。然し  
のころは又變りましたね。  
保田 歌壇といふところも移り氣なところや  
な。よいのが出来んのは當り前です。  
前川 自分といふものがないのでね。流行に  
すぐなびいてゆく。

歌壇外の歌人  
保田 最近感心したのは「くれなゐ」といふ  
雑誌に出てゐた田中克己の歌、あんなきれ  
いな歌、近頃ないですね。あれだけぬけぬ  
けと歌へたら大したものですよ。口先で歌つ  
たにしても、實に氣樂な、樂な歌だ。西行  
のやうな歌口です。

前川 如何にも田中君らしい歌で面白かつた  
あんなにちよけられたら愉快や。しかし今  
の歌人は相手にしませんね。  
保田 そやけどあれはよいですね。彼は二十  
年も作つてゐるから何でも知つてる。歌壇  
に屬さず歌壇とちがふだけの話です。  
吉村 素人ぢやないがアンデパンダンといふ  
ところだね。

前川 大鹿卓の歌にも實によいのがあつた。  
保田 十九歳、二十歳頃の歌でもいいのはい  
いですね。年をとれば心組みは進歩するの  
でせうけれど。  
前川 歌壇を無視して、歌壇外からよい人が

如何様に汲むかが一番むづかしいので、そ  
こに現代歌人の惱みがある。殊にこんな時  
代だもの。  
保田 それは非常にあるな。實際自分の新し  
い氣持からそれを完全無敵な形であらし  
たらいいのだが、古いイメージで以て言葉  
だけ新しくするなどは、一種の文學的暴  
力主義ですからね。さういふ暴力主義の時  
によい時もあるが悪い時が多い。終戦後は  
どうか知らないが、氣持が少しも新しくな  
らずに言葉だけ新しいのでは駄目で、もつ  
と根本的に基本的に新しいのでなければ駄  
目ですな。  
前川 終戦後はその言葉の暴力主義が普通み  
たいになつてしまつて、それが却つてよい  
作品だといふやうな傾向がある。芭蕉のか  
のみなんかとおよそ正反對です。  
吉村 破調や字餘り、字餘りなんてぢやなし  
に三十五六字の歌なんてあるが、あんなの  
は暴力に屈したみたいだね。  
小説家と短歌  
前川 小説家では歌をどう思つてゐるのかね  
吉村 小説書いてる人で歌作るのには誰々かな  
保田 昔はみんな作つてゐるだらう。  
龜井 井伏さんぐらゐまでだらう。五十年代以  
上はみんな作つた経験はあるらしい。  
保田 川端さんの作つた歌つてどんなのかね

出ると思ふし、それは出るでせうけれども  
歌壇はやはりこれは絶対に無視出来ないの  
でね。  
保田 あなたの本に長歌があつたでせう。あ  
れ誰の作ですか。あれに一ついいのがあつ  
た。

龜井 僕のだよ。あれを作るのに一週間かか  
つた。評論を書くよりずつと苦勞をしたね  
保田 あれはよかつたよ。君の作だつたのか  
長歌について  
龜井 前川さん、長歌やるといいよ。日本歌  
人でも長歌をやつてごらんよ。  
前川 やりたいのだけど、つい古臭くなるの  
でね。正直に言ふと長歌を作るのは僕には  
割合らくなんですよ。古語をあやつるとい  
ふことはらくですからね。らくだからつい  
魂が入らない。短歌のやうに三十一文字の  
形一杯にそれをふくらませるといふやうに  
行かないですから。らくなのでなくて本當  
はむづかしいのかも知れんけれど。

吉村 しかし前川君、長歌を作つたらどう。  
その中へちよいよいよ普通の言葉や現代語  
を挟んでね。全部古語だと古めかしくてい  
けないから。  
保田 窪田空穂なんかうまいでせう。全部今  
の言葉ですよ。養徳社から出た何とかといふ  
歌集ね。それにあつた。

龜井 川端さんは作らないね。  
吉村 しかしあの作品はやはり短歌の抒情だ  
前川 小野十三郎は短歌の抒情を追放せよと  
言つてたが。  
保田 さういふ努力をしてゐるのは多いね。  
吉村 舟橋聖一だつて非常に短歌的だ。  
保田 さう、割にうまいですよ、舟橋は。う  
まい小説書きよる時もあるな。  
前川 日本の文學は今でも皆んな多少は短歌  
的の抒情を持つてゐるね。持つてゐたつて少  
しも構はぬと思ふがな。  
保田 谷崎、あれは古今の抒情だ。  
前川 「こころ」といふ雑誌に歌出してゐた  
ことがあつたね。  
保田 歌集があるらしいね。  
前川 「都忘れの記」といふのね、あれは三  
好達治が悪口を言つてゐたが。  
吉村 創元社が出したのでね。僕のところへ  
本を持つて来たんだ。僕に呉れるといふか  
らそんな高價の本、あの時で千圓だつたか  
らね、そんなの要らんといいふと、悪口でも  
構はんから書いて呉れと言ふのだ。僕は谷  
崎さんも知つてゐるしね、書くのは嫌だと  
斷つたんだが、まあ本だけ貰つておいた。  
それを三好が持つて行つて書いたんだ。和  
田三造が繪を描いて、歌は夫人の松子さん  
が書いたので、肉筆ぢやないが、色刷りの

綺麗な本ですよ。

前川 谷崎さんの歌の師匠は吉井さんといふ所だね。

吉村 まあさういふことになるね。

保田 吉井勇をいらいまはしたみたいだが、面白いです。

亀井 「こころ」の歌はよかつたよ。

らくな句とらくてない歌

前川 あなたは大分歌があるでせう。

保田 去年は四五十首、一昨年は五十か六十首ぐらゐですかね。

吉村 大分あるんだな、前川君とこで「菊のひこばえ」とかいふのを僕は見えたよ。

前川 この頃文章のあとへ歌を入れるのがちよいよ。

亀井 それは前からもあるね。しかしいいもんだね。

前川 飄飄齋がね、天聲人語のどん尻に必ず句を入れてゐたが、あんたは歌を入れるといんだね。

吉村 短歌的抒情つていふわけだね、いいんだけれどなかなか骨が折れる。

保田 句でも骨だらうな、飄齋は必ず入れよつたからな。虚子の次かも分らんですよ、ああいふ才能は。

吉村 誰かに供出してもらはんと、とても駄目だ。

保田 短歌ではしんどいね。俳句はちよつと口先で言ふだけみたいところがあるが、歌はそりやちよつと出来んな。三十一文字は出来ても歌はなかなか出来ん。

前川 本當のものを作らうとするとそりやそうだね。

師匠と弟子

亀井 このごろは何でも勉強の仕方が悪いんだ。師匠もよくないし弟子も悪い。

前川 今から思ふと馬木赤彦のやり方はよかつたと思ふな。彼は弟子をまるで徒弟を仕込むやうに仕込んだもの、それで暖いんだからね。

保田 さういふきびしさがなくなつた。

吉村 そのかはり昔酷な、いち悪なと思はれるやうなものもあつたね。まともに教へないんだね。昔の話だけど、文楽の師匠と弟子が停留所で「おい、お前何になるんだ、そんな傘の持ち方つてあるかい、廻して見ろ」こんな風に、ふだん教へないで歩いて意地の悪い教へ方をする。ヒューマニスティックぢやないね。

前川 しかしそれは味があるね。勘をはたらかせといふことだから。

保田 恐いですね。言ふべきことを言ふべき時に言つたり注意してやるとまともにとるが、さうでない場合は、いちめられてゐるやうに取るし、又さういふ風に聞えるものだ。人間のすることだから形だけ變へても駄目で、一長一短はある。

吉村 非人間的だから知らないが、皆することだ。

前川 今は大体ぼつたらかしなんだ。格言みたいなものもないしね。

吉村 昔は逸話と格言に満ちてゐたね。

保田 今は駄目ですよ、そんな味はなくなつた。

映畫をやめるとよい

前川 腹の立つことが多いね、何も昔に郷愁を感じてゐるわけでないが、今の教育だつて六茶九茶だからね。

吉村 教へる方も悪いが學ぶ方も悪い。

亀井 全部映畫の影響ですよ。映畫をなくしたらいい。映畫と新聞をなくしたらいい。

保田 汽車もいけないね、汽車や電車もなくなつたらいい。

前川 歩くのはしんどいけど、藝術で奴は歩かなけりやならんのだからな。

吉村 まあしんどいね。

保田 近代生活を全部やめたい。それ以外に立ち行く道はないね。

吉村 しかし、映畫が一番長いので三時間位でせう。腰かけて目を開いてりや、奥さんや子供や戀人や誰とも見られて、簡單

に中世を學んで来ればよかつたんだ。惜しいと思ふよ。ポツチエリとかをね。

保田 ルネッサンス時代もいいが、その少し前の作品が一番いいね。

前川 十三世紀あたりを見直すんだな。

吉村 話をきいてゐるともうまるで現代否定だ。

亀井 それでいいんだよ。

保田 それでいいんだ。

吉村 困つたことになつた。

二月歌會豫告

○大阪歌會

時。二月十八日(日)午後正一時

所。東區北濱四丁目三〇「江南北濱寮」

(地下鐵洗屋橋南出口を東へ入り最初の辻を北へ折れて東側)。次第。近作

一首を十五日迄に西區江戸堀南通一ノ

五第三江商ビル調査室片山謙二宛送附

のこと。費。五十圓

○奈良歌會はせ

時。二月二十五日(日)午後正一時

題詠「北」「涙」各一首を半紙に筆太

に大書して持参。判者。前川佐美雄。

費。七十圓

右歌會はすべて案内状を發せず。この誌上廣告を以て案内にかへます。

やうに取るし、又さういふ風に聞えるものだ。人間のすることだから形だけ變へても駄目で、一長一短はある。

吉村 非人間的だから知らないが、皆することだ。

前川 今は大体ぼつたらかしなんだ。格言みたいなものもないしね。

吉村 昔は逸話と格言に満ちてゐたね。

保田 今は駄目ですよ、そんな味はなくなつた。

映畫をやめるとよい

前川 腹の立つことが多いね、何も昔に郷愁を感じてゐるわけでないが、今の教育だつて六茶九茶だからね。

吉村 教へる方も悪いが學ぶ方も悪い。

亀井 全部映畫の影響ですよ。映畫をなくしたらいい。映畫と新聞をなくしたらいい。

保田 汽車もいけないね、汽車や電車もなくなつたらいい。

前川 歩くのはしんどいけど、藝術で奴は歩かなけりやならんのだからな。

吉村 まあしんどいね。

保田 近代生活を全部やめたい。それ以外に立ち行く道はないね。

吉村 しかし、映畫が一番長いので三時間位でせう。腰かけて目を開いてりや、奥さんや子供や戀人や誰とも見られて、簡單

に中世を學んで来ればよかつたんだ。惜しいと思ふよ。ポツチエリとかをね。

保田 ルネッサンス時代もいいが、その少し前の作品が一番いいね。

前川 十三世紀あたりを見直すんだな。

吉村 話をきいてゐるともうまるで現代否定だ。

亀井 それでいいんだよ。

保田 それでいいんだ。

吉村 困つたことになつた。

にすむからね。小説では讀みたくなないと

るも我慢して讀まねばならんといふことも

ある。救はれんですよ、そんなのは。映畫

ならすつと見てしまへる、とても競争には

ならんね。

前川 これからは愈々映畫時代になるね。そ

れがよいか悪いかは又別だけだね。

亀井 見ること、聞くこと、言ふこと、これ

三つが駄目になつちやつた。本當よ。

保田 それ三つ駄目になつたら全部駄目と同

じやないか。

亀井 さういふことだよ。

世界性といふこと

前川 映畫は一回的のものでせう。讀むのは

あと戻りするが、これは考へることがな

い、頭腦を刺戟しない。感覺だけ刺戟して

ゆくのて樂なんだね。

前川 段々刺戟のつよい感覺に馴れてゆくと

どうなるかね。僕なんか映畫館へ入ると

よく眠れるよ。これは怒られるかも知れんが、本當だよ。

亀井 君は映畫を見る? 保田 見ないね。前川 映畫は現在残る藝術ぢやないけれど、將來残る藝術になるだらうね。文學や繪畫みたい。吉村 そりやさうなる可能性はあるね。

○歌會のこと。一月六日觀寒牡丹花會は大和北葛城郡當麻村栗野、中將姫ゆかりの石光寺に開いた。一泊がけの會であつた爲に、そして新年早々である爲集りは尠なかつたが、それでも十四人。一分間ゲームの即興歌を作つたり合、評會を開いて筆記をとつたりした。詳細は別掲の通りである。大阪歌會、奈良歌會はせは次號でないとい報告出来ないが、今後は京都も東京も又各地の歌會も誌上に豫告して、毎月活版に開いてゆくやうにしたいから、發行所宛前月五日迄に御通知ありたい。愛媛縣中萩町及び新居濱では、齋藤富海子、山脇克巳、守谷翠城氏らが中心になつて毎月三、四十人集合、又、大阪では梁雅子氏宅で毎月十數名の集合がある。

○會員の著書。女流十二人集「朝の杉」は一部も残さず買切になつたが、梁雅子「うづまき」堀内氏「はるかなる想ひ」は若干殘本があるから希望の方は申込んで頂きたい。又、新人十二人集「高踏集」は昨年おしまつて出、十五人集「新説」も漸く出来た。これは急速に無くなる見込みだから本號御覽次第申込まれないと手に入り難いこととなる。右二つの合同歌集は「朝の杉」に比べて装幀は一段と美しく、垢抜けたものなのである。なほ續刊の合同歌集は目下人選中である。時局の影響によつて歌集も雜誌も、又かつての戦時中のやうに簡單に出せなくなるかも知れ

編輯後記

○お正月に雜誌が居いて大變嬉しかつたといふ通信を澤山頂いた。もう出ないのかと半ば諦めてゐたが、こんな喜びはないとも書かれてあつた。今度は是非とも續けるよう、會員として又同人としての責を果たし、雜誌の爲に出来るだけの盡力をすると言つて來られた人も多數あつた。忝いことである。私もいつ迄も怠つてゐるわけに行かぬ。今度こそは何としてでも雜誌だけは出して行く決心である。それはわれわれの理想が何も實現出来ぬ。それはいくらも考へは持つてゐるのである努力することにしたい。

○雜誌を休んでゐてもわれわれの歌は少しも衰へてゐない。夢もなければ詩も文學もない今日の短歌、現實にすり切れた寒々しい短歌の世界にわれわれの歌はやはりどことなく豊かな生彩を放つてゐるとは知る人ぞ知る人かには分つてゐるのである。作品以外の何かの力、殆んど暴力に等しい野蠻性を發揮しなければ物の言へないやうな歌人はわれわれの敵ではない。さういふのは問題にならぬし又する必要もないのである。いづれは泡沫の如く消え去るものだが、そのやうなものを氣にする暇にもわれわれは一首の歌に精魂を盡すべきである。

ず、さういふ豫想のもとに合同歌集も個人歌集もこのところ急ぐ次第である。○歌集の豫約。前號に於いて歌集の豫約を發表したところ、早速豫約の申込みをして下さつた人がかなりあり、まことに悉く思つてゐる。一人で三十部ぐらゐり引受けるといふ人もあつて、これなら所期の目的を圓滿に果せることになりさうである。本は出来な時でよいのである。豫約だけすんで皆んなして頂きたいと思ふ。第一期は次の五冊である。一、宮崎智恵歌集 二、片山恒美歌集 三、見原文月歌集 四、中川忠夫歌集 五、前川 綠歌集 右の他に古川政記、船津礎次郎、東博、齋藤富海子、山崎雪子、山本保、山崎幸夫、山村貴美、笹倉道枝、金子千鶴氏らもそれぞれ歌集出版の希望はある。その他まだまだ希望者はある筈である。○會員消息。大阪の北川和歌子氏は結婚されて中島姓にかはられた。結婚記念として日本歌人發行費の中へ金圓を寄附された。大分の田口正巳氏は先年死去せられ、鳥取の杉原一司氏も同じく死去された。二人とも才能に恵まれ將來が期待されたに惜しいことである。杉原一司の遺稿は前川佐美雄が整理し近刊の合同歌集に加へられる筈である。合同記念會のため長野より齋藤史、山口より宮崎智恵、富山より山村貴美、愛媛より齋藤富海子氏らが上阪、齋藤史、宮崎兩氏はそれぞれ發行所が二泊。なほ史氏はついでにBKから放送せられた。山村貴美氏は夫君の轉任により富山

から福井に移られた。關登久也氏は悪質の盲腸炎で岩手花巻病院に入院手術せられたが経過良好の由。早川かつ氏の夫君孝平氏は死去された。孝平氏は前川佐美雄氏と三十年度の親交があり、日本歌人の陰からの支持者である。温好な人格者であつたに惜しいことである。金子千鶴氏は一月四日BKから短歌の朗詠を放送せられた。

編輯・庶務・會計より

○投稿の歌は必ず最初の行に姓名を記し、最後のところに住所と姓名を明記して頂きたい。歌の上にマルを附したり番號を入れたりするのはやめて頂きたい。必ず原稿用紙に楷書で分り易く認めることが肝腎。變態假名は用ひぬこと、及び新假名遣は一々歴史的假名遣に改めなければならぬから、歌に限り絶対にやめて頂きたい。日本歌人は歴史の假名遣に據るを立前としてゐるからである。○寧樂雜誌會の座談會は好評なので、又別なものを試みて頂くつもりである。○雜誌の會計はながら休刊してゐた爲にスラムに引き難い。そこで一大決心をして經營を確立する爲に同人諸氏に諮り、依頼するところがあつた。お互に苦しい時だけれど、雜誌の爲と思つて、何分の援助と盡力を惜しまれぬやうにおねがひする。○今月から會費未納の方を整理し、前金切の場合は雜誌發送の時の封皮に「キレ」の捺印をすることによつて、その通知にかへることとした。會費を滞らずに納め、新會員をどしどし作つて頂くと雜誌は發展する。

規約抄

○日本歌人は前川佐美雄を代表者とする。○日本歌人は會員と同人と維持同人とから成り、會員は一月六十圓、同人は一月百圓、それぞれ三ヶ月以上を納めるものとす。維持同人は内規による。○投稿歌数は十首以内とする。但し一首を必ず二十七日以内に楷書で認むること。締切は前々月十日までのこと。原稿の末尾に住所、姓名を明記すること。○添削は十首まで百圓。但し返信用切手封皮同封のこと。○問合せは往復ハガキ又は返信料同封のこと。

日本歌人 (毎月一回一頁) 定價六十圓・送料六圓

昭和二十六年一月二十五日印刷  
昭和二十六年二月一日發行  
奈良市坊屋敷町四一番地  
編輯人 前川 佐美雄  
發行所 日本歌人發行所  
印刷所 國際文化協會印刷部  
奈良市坊屋敷町四一番地  
京都府馬場丸五條下ル  
京都府馬場丸五條下ル  
印刷所 國際文化協會印刷部

前川佐美雄編輯

# 日本歌人

五月六日號

日本歌人 第二卷 第五号 昭和二十六年五月二十五日印刷 昭和二十六年六月一日發行 通巻第一〇〇号 昭和二十六年三月五日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)

第二卷 第五號

日本歌人十五人集 (近刊)  
歌集 懸谷 價 二五〇頁  
送 二四〇頁

前川佐美雄・中川 忠夫・堀内 小花  
中塩 清臣・古谷 久里・井上 彰  
木村賢一郎・井ノ口豊男・俵 亦市  
渡辺 唯雄・西本 正信・沢 效一  
千々岩好子・横田 利平・田中 愛花  
右十五人の新作八十首づつを収む。  
「新説」及び「朝の杉」の姉妹篇として  
日本歌人の作風を代表するもの。  
京都・白井書房

日本歌人新選十五人集 (近刊)  
歌集 空の鳥 價 二五〇頁  
送 二四〇頁

森たかみち・木暮歌之助・轟 太市  
佐藤 針子・岩間 史子・鍵岡 正磯  
鳴上 善治・北嶋 ゆり・田垣 晴子  
遠藤 正英・難波 礼二・難家 秋良  
山中智恵子・近藤 久子・京田千代子  
右十五人の作品八十首づつを収む。  
「高踏集」の姉妹篇にして「日本歌人」  
の今後を荷ふ新人の力詠集。  
京都・白井書房

見原文月著 (最新刊)  
歌集 雲泥 價 二五〇頁  
送 一八〇頁

序文 前川佐美雄  
装幀 棟方志功  
苦節三十年、やうやくにして処女歌集  
生る。出づべくして出でざりしは著者  
の名人氣質によるもの。周圍よりの懇  
望黙し難く、こゝに新装を得てひろく  
江湖に見えんとす。  
御清鑑を乞ふ。  
京都・白井書房

近刊

歌集 みごり抄 前川 緑著

歌集 題未定 宮崎 智恵著

歌集 既刊 堀内 民一著

歌集 想ひ 梁 雅子著

歌集 朝の杉 日本歌人

歌集 高踏集 日本歌人

歌集 新説 日本歌人

梁 雅子著 (新刊)

歌集 うづまき 價 一五〇頁  
送 一二〇頁

この歌集は今の歌壇のごこに出しても  
恥づかしからぬもの、女流歌人の誰  
人にも劣るものでないといふ事を信ず  
る。のみならずその歌風は「日本歌人」  
の女流の中にあつても斬新であり、且  
つ眞実である。新作四百餘首を収む。  
(前川佐美雄序文より)  
京都・國際文化協会出版部

橋本定芳著

窓の日さし 價 二三〇頁  
送 二四〇頁

詩ならぬ五十九字詩  
和尙の詩を、あちこち黙唱してゆくと  
いかさま一つの天國に、飛天女、躍童  
子らが、蝶にたはむれ、鳥を追ひ、時  
に、和尙にむかつて立ち小便を向けて  
ゐる景色など、夢影として見えてくる。  
(吉川英治氏序文より)

奈良縣柳生村 芳徳寺 紫嵐門

五月號 目次 (通卷第百号)

道品	其一	田中武彦	二
見原	文月・堀内	民一・横田	利平・山本
東博	佐伯	勝広	木村賢一郎
山崎	幸夫・土屋	忠司	片山謙二
藤田	保	藤田	耕三
田中	武彦		三
作品	其二	前川佐美雄	一〇
齋藤	史・森川	綠・齋藤	富海子
大和	克子・森田	勲・江村	峰代
菊田	たかし	高木	富貴子
古谷	久里	その他	
千鶴	山崎	雪子	
田中	愛花		一二
梁	雅子		一三
前川	佐美雄		一四
吉村	正一郎		一五
棟方	信志		一六
石川	克己		一七
田中	武彦		一八
前川	佐美雄		一九
作品	其三	武彦	二〇
文月	綠	民一	佐美雄
堀内	小花	中塩	清臣
井上	彰		
前川	佐美雄		二一
作品	其四	武彦	二二
文月	綠	民一	佐美雄
堀内	小花	中塩	清臣
井上	彰		
前川	佐美雄		二三
作品	其五	武彦	二四
文月	綠	民一	佐美雄
堀内	小花	中塩	清臣
井上	彰		
前川	佐美雄		二五
月瀬	吟行会詠草		二六
智恵	その他		
前川	佐美雄		二七
雜録	歌会予告		二八
後記			二九

道 田中武彦

いっぽんの道なり鳥ら疑はずわれらさまさまに思ひつ迷ひつみにくく、苦しむさまは見せねども夜の雨のごと騒立つところわが生活に忘れてゐたる読書のことあり、読書のこと忘れてゐたる世の交はりの冷たく魚の如くなるそれにも馴れて起居たひらか石の表情大胆にして門口ふさぎ寝そべりて吾に踏めよ踏めよと紋白蝶はやも来てゐついまのいまで濡れてゐたりし菜たねの花に赤き花そこにほころぶ細木なる躑躅の嫩葉ふき出でたればなまなまし菖蒲の香よと疑ひぬ感情は複雑にして吾兒と湯の中巧みに操る言葉自在なれば私などはもう信じてゐる肉体を裝飾とする慣習はいつの頃より始まりしにやあらむ

作

品

其一

見原文月

薬師寺の塔の水煙そのかみの金色秘むる地に降されて水煙の天人は地上に降されて眼をつむるぬ逆しま立ちぬ一心に笛ふく天人さくら咲く伽藍の空をひたあこがる、白雲の塔にくだれば水煙の天人の手の笛先づ濡る、地の上に花みちたれば中空の水煙天人裳はひるがへる夕焼の空のなからに透きとほる水煙天人十二人の身は

堀内民一

雨縁に白梅のはなびら散りまがひふと錯乱の美は夕光に春かけり深きみむろの石佛の御眸は霞みてをがまれたまふ奏樂飛天春はかすめる菜の花の野べに降り來上蝶をさそひて童女一人雨ふる花の庭にやり桃の一枝を剪らしめにけり花朽ちし梅の一枝に一点鐘白一輪が雨に澄みみつ

横田利平

妻子らと慰ふ樹の間の静けきに過去は秘めて見つ水の上の光よ平安の今のうつも過去もなべてあはあはと漣の列かぎりなき漣の列をかなしめる傍へに吾兒は石投げのたりに

山本保

夕雉子いきを短かく啼くきけば父母思ほゆ腸を断つがに

相呼びて啼くにかあらむ山の書を雉子のこゑは短くひびく堪へに堪へ一つの息を啼きて吐く山の雉子が佇ちてわが聴く貧しさを傷むとあらね冬の日は沁みて思ほゆわが老の果

藤田 嗽漣

梅羊羹手にちぎりつゝ汽車の中に故郷の海をしきりいふ妻波白く騒ぐ勿来の海見えていつになく妻が言の幼き夢多く一生を生きむ妻よ子よ見よ織のべの美しき貝膝がしら冷えゆくのみ意識にてサイネリヤの花の一鉢もなし山峽に薄れゆく虹袂別の道を急ぐと來にしはあらず

東 博

身のまはりひと色の風吹きながれ音に立つものは知らぬ人声曇天に龍胆ひとつ疎み咲くわが二十歳に通ふあはれさ疎み咲く龍胆ひとつ哀れなれどあはれがられるは不幸の始めかゝなべて幾日幾夜をした燃えのこの忍恋を明かす術なし

佐伯 勝廣

ふていなるゆめとし云はむ人戀ひて緑の画仙紙ひろげ初むる草笛にさへられたるかの日より眩しき指をもてば悔なし身の内にながるゆめは黄色なる蝶の翼よりもろき日もあり茅花咲くぐるりなりせば眸を伏せて形なきこの恋も語らむ荒くれし指かいくゞり陽炎はたはむる如くあざける如く

木村賢一郎

アンドロメダ青く瞬く夜を取戻しそれより群衆に残されぬ何もない部屋に色あせし造花飾り鈍色円盤ゆつくりまはす

# 「うづまき」の印象

吉村正一郎

歌でも俳句でも、一首一句が作者を離れて独立して、藝術作品としての完結性をもっている場合には、作者その人について知らなくとも、読者に感受力さえあれば、作品は十分に鑑賞され理解され納得される。読者としてはそれが都合がいゝので、それを希望したいのだが、昔の歌とちがって、現代歌人の作には、そういう希望も少々無理かと思われる。

歌が端的な手取り早い自己表白の文學であることは今も昔も変りはないが、その自己が昔と今ではちがっている。小野小町が何ものであったか傳説以外に何も知らなくとも、「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」の歌の感情はよく分る。そこに歌われている感情が單純で素朴なからだ。現代歌人は小野小町にくらべて、多かれすくなかれ複雑な心理や生活感情のなかで生きています。その心理や生活感情には抑揚屈折陰翳があり、寝てもさめても自分と云うものから離れられなくなっているくせに、その自分と云うものも、決定されているようでもあれば無限の可能性にたつらなるようでもあり、突きつめれば何であるのやら実体はすこぶるあいまいな節もある。そこで現代歌人の自己表白が象徴主義へ赴く一傾向は避けがたい。梁雅子夫人も

その一人と見受けられるが、こういう心象風景を詠った象徴的な作品は、作者その人を知らなくては理解できぬというよりも、作者その人をよく知れば知るほど、味いやすく納得されやすくなるということがある。だれの作にもいくらかの自己誇張や、錯覚や、ひとり合点はあるもので、それがまた読者の理解をさまたげることにもなる。

ところで私は「うづまき」の作者についてよく知らない。梁夫人にはとき／＼お会いする機会があったが、一言二言口を利いたといふ程度で、ゆつくりお話ししたこともなかった。夫人がどんな日常の生活をしておられるのやら、その精神が何を指向し何を問題とし何をどう感じておられるのやら、私はいかに何も知らないのだ。そこで夫人の歌についてかれこれ感想めいたことをいうとなると、もしそれに深入りするとなればなおさら、あるいはひどく見当違いの非礼をおかすことにもなりかねない。

「うづまき」三百六十五首を通覧して、讀後の印象を卒直にいうなら、梁夫人は歌人として大変力量ある人だと私には測定された。歌壇の現状動向に不案内な私には、これらの歌を歌壇の公定相場に照らし合わせて品さだめすることはできないが、それが歌壇的な好みによつてどういう位置を與えられることになろうとも、そういうことは無関係に、これらの歌はどれもこれも十分に立派である

一首一首に力がこもっている。力がこもっていても、馬鹿

力などというものではない。その力を効果的に發揮する技法を見事に会得しておられる。技巧が鍛錬されているのだ。歌歴十年、この十年間を、歌とまともに取組んで、孜々として倦まず撓まず、この一筋につながつて怠らず精進してきた人であることを思わせる。ひたむきに歌に休当りして、正攻法で組みついているすがたは壯とやいわん偉とやいわん、天晴れな女丈夫ぶりである。ハリキリの藝熱心という点で、梁夫人はどうやら「日本歌人」の京マチ子だ。あるいは歌壇の京マチ子であるかも知れない。努力賞の値打は申すまでもないとして、この「うづまき」一巻で「日本歌人」演技賞が贈られるも、すくなくとも私には異存がない。

火と燃えてわが爲せしことありやなし眸にくれなぬの大輪牡丹  
牡丹花の濃きくれなぬのしづもりを女人のわれやみつゝくるしき  
華やぎも驕りもすぎで大輪の牡丹の花のごとき日ありや  
いや高き誇りぞ美しくれなぬの牡丹の前にわれは坐れり

牡丹を詠んだこれら一連の作は、どれもこれも堂々としていて押出しがよく、立派で、迫力があり、歌格が大きい。写実を根底に踏まえていて、しかも写実のなかに自己を見失わず、主体的に対象を大きくつかんでいゝ。梅原龍三郎の量感を思わせるものがある。集中の圧巻といつてよいと思う。

歌を通じて感受される作者の人間像は、骨組がしっかりと、背骨が通っている。私の推察にして誤りなければ、この人は頼りないところ、あやふやなところ、危っかしいと

ころのない人だ。「椿もろしひなげしもろし脆く赤き花思ひみる底なしの日は」という、はかなげな一首があるが、どう致しまして、「底なし」どころか底はちゃんとする。と私は鑑定したい。「底なし」などというのは、ロマン趣味（主義ではない）の気の迷い、ふとしたひとときの錯覚にすぎまい。「白髮三千丈、憂によつてかくの如く長し」の類であるうか。

私は「うづまき」を通読して、これはなかなか／＼カローリの豊富な歌集だと思つた。カローリがあるといつても、これらの歌はすこしもバタ臭くないから、ピフテキではない。食べものにたとえれば、まず、餅かスキ焼かおでんか、であろう。ともかくもこれをたつぷり食べた後では、私は一食抜いてもいゝという気持になつた。読者というものは虫のいゝ勝手なこと考へるもので、私が巻を伏せてウイスキー・ソーダでも飲みたくなつたことも、序でながら正直に告白しておく。

梁夫人の歌はその装いが何であろうと、質的には大阪の庶民的な生活感情を基底としているように、私には見受けられる。その点も京マチ子と一脈相通じるものをもっているようだ。「むかしより身にそぐはざる蓆たけき相にいよよへだたるとし」。梁夫人はお洒落なんかしなくない。貴族趣味にハッキリ背中を向けていてよろしいのである。

棟方志功

この歌集の歌をいただいて、梁夫人のからだから吹く、一つの色、彩といふものを見ました。詠へる彩といふものか、何か生まな火炎を目に過ごされたといふ感じであります。歌として、これ以上のものは無いと思ひますが「うづまきの歌人」の匂ひといふ事の「歌へる」よろしさに参りたい事です。生臭い風が、吹いて身軀をつゝんで来る様に本当ですか。ら仕方ありません。これが本当といふものだらうかと、女の合點を受けるのです。想ひがあつて、こゝろのつゝみがあつて、さうして見事な姿が目の前に、身軀の前に肌かつて来るのです。さうした身からたの中にも、たしかな身がまへがあつて、きびしく烈しい限り無いのです。かういふ、かぎり知らないところに梁夫人の歌躰がある事と存じます。たゞ、それは絵の様な歌だと思ふ歌が、この歌数の中にあるのです。歌人としての歓喜か、哀しさか判りませんが、さういふありかたの道みちを梁夫人の歌の眞身が歌つて居るのを身に應たへて判つて来る様です。

厚き胸叩きて云ひしこともなし人みな遠くしづけきまひ云ひしこともなし。のよろしさがこの歌の安心さであつて、立派であります。人みな遠くも孤哀といふか、その内にもど

胸つまらせ草木みつむる癖ありしがくすくすも球根の芽は胸つまらせ草木みつむる。これもよろしく、癖ありしがくすくすも。もよろしさをばかり。

松山の松に煙りて山ざくらほのく遠し咲いてゐるなりこの歌の美しく当然なものゝよろこびとでも云はれる有難さに、わたくしの念ひと同じなる、松、煙、ほのく、遠し、咲くやまさくらを歌してゐます。

手にとりて見れどもさくら／＼花とらへがたなく浮きゐるものをさくら／＼ばな。浮きてゐるものを。の眺め詠みの込められた気配の在方に、この歌のひろさ、思ひにふけりたくあります。

大胆にふと笑ひたり所詮わが仮面の顔に花降りかゝる万葉とした、魂にどう仕様もない、この香ぐはしい肉（人の肉ではなく櫻の肉、強ひて云へば櫻の精の肉でもよろしく）の様な微妙の匂ひを伏せて、この歌のちからを思ひ想ふて見ました。

一陣の風に縞なす花吹雪わがたまゆらの夢さむるなよゆつとりした想ひといふものに憑かれた、夢の様なねばりと息付きを感じられてなりません。みなみ風濃く吹きめぐりうつそ身の膚かなしくなりにけるかもうつそ身をかこひ、うつそ身ならざる事に於いてのよき、かなしくなりにけるかも。と歌ひ切つた事の美しき限り、立派さをよるこびます。深蓋とした、こゝろのこみ上げといふ

うして、この事だけと云ふこの事が出てゐて美しいのです。これはまたおろかに燃ゆると思ふなり愚かなる事の楽しみ盡きずおろかに燃ゆる。のいのちあがるものを、おろかなる事。と云ひふくめた大妻が、見事だと思ひます。楽しみ盡きず。は有情の意義を伸ばして、そしてゆたかな想ひ無盡であります。

若葉時の青透くなかに年古りし手をかざし見るわがいのち惜し年古りし手は次の、わがいのち借し。にて年古りては居なく、いつまでも若しの所から、とゞけられた、わがいのち。である様です。いのち惜し。のしがよろしゝと存じます。

音たて、昨日のわれの脱殻が顔さへしはみ散りゆくなるよ音たてゝ。は烈しい事です。しはみ散りゆくなるよ。の絶唱を事程に、わたくしは好みます。かう歌はせるばかりの力の力を敬ひするばかりであります。

つれに何か敵あるごとく思ひゐる眸に赤や黄の花映りつゝ眸に赤や黄の花。けわしい姿が狂ふ様にわかつて来る様です。力盡きてうづくまるとき身をかこむまぼろし共はうちはやすなりまぼろし共はうちはやすなり。まぼろしどもはうちはやすなり。

この深夜の部屋にもひびくわが鼓動つゝと聞く怒りてあれど部屋にもひびくわが鼓動。とすくめた気持を怒りてあれど。と沈めたあり方、その在方。

世界の中に、わたくしは連れられて行くのを逃げません。咲き揃るさくらに深き晝開けていまは此處より見るばかりなれ有常なる、無常なる姿に、更に歌人のおもひ伏せを揮身に歌ひ上げた歌として見上げました。

夕ざくら花枝重たく暮れゆけば闇夜とならむ遠き灯つきぬ花枝重たく。の重たくは歌人の女性として、まして夫人としての、こゝろの念願といふものゝ重たさをよくによく。

いまだわが秘そめたるものゆらぎたつ春の眞晝の野に立ちにけり行く春やみぢめにありと思はねどわが影くらし花吹雪くときはなばなの影うすれつゝなほ佇ちぬあえかに遠き春かへらざる狂はしく父呼ぶ母にゆすぶられおそかに遠くなり給ひけり泣き切りて立たむわが生の的とならむいまだ胆る父の死顔澄みて

二七日三七日すぎてもまざぐれど虚空に遠し父のおもかげ誰も知らぬ死処に墮ゆる弟の恨みにしげれ熱帯の草ジヤングルに屍は朽ちていくとせか次が妻と子は生きてた、かふしなやかにある日は花もかざしたれ嵐に向けば髪逆巻きつ眼底の暗きよるけ春日向すみれを見つゝ人をうたがふ葉の音にあえかに舞の物狂ひ狂はば人もたのしくあらむ

狂はば人もたのしくあらむ。は「藝」を遊ばし得て、それなりに美しさを無縫にからませてゐるばかり、美しくしゝ。偽られとほして遂に美しき神をぬがけり行く白雲よこれは見事なる歌だ。見事といふて云切れる歌ではない、事の立派なばかりだ。

残りたるものかき立てゝ否と云はむ時盡きぎはの大輪牡丹



ん心したくつてムヅムヅしてゐるのだ。心から感心する機会を手ぐすねひいて待つてゐるのだ。所が出てくる奴、出てくる奴、何たる安つぼき、うす汚なき、おつちよこちよいばかりであつたことか。こんなもの扱へば受けるだらう、こんな顔すればほめられるだらう、ポオズとジェスチニア、唯そのみだ。心がない、魂がない、誠実がない。誠実、魂、心、でさへもポオズとジェスチニアの性に使つてしまふ。

そのやうなドロ絵具的風景の中で数人の女性の誠実さが、本物の光を放つてゐた。

山川京子、生方たつる、葛原妙子、そして「うづまき」の著者梁雅子、——女に甘いなど申す勿れ、青春幻想の日はともかく、現在の私は女性軽蔑論者、男女同権反対論者である。女なんて本當は仕方のないものだ。

しかしその仕方のない女性たちの歌——困つたことに、これはすばらしい。彼等、否、彼女等の歌は、ポオズなど考へてゐるひまはない。対外的ジェスチニアなどかまつてゐられない。如何にして自分の心を知るか、それを如何にして表現するか、この問題に精一杯取組んでゐる。このごまかしのないくそまじめな態度が、ごまかされない読者を打つ。

私は王朝時代につづく女流短歌の時代がくることを予言していふと思ふ。

(二六年四月)

たまさかの逢ひの臥床にわが泣けば触れます夫よ草のほひすの二首、とりわけあとのものにひどく感動しました。これは軍國時代の日本の女性のうたの中で絶唱だと思ひました。「思ひ出より」の中の二首です。このごろあらためてよみ軍國の妻なりとわが勵ましてこの若妻の口封じ來し

日の丸の旗打ち振りて追ひやりし後影見ゆそのうしろかげ  
狂ほしく父呼ぶ母にゆすぶられおごそかに、遠くなり給ひけり  
なまがらの温み消えゆく耐へかねつ手足握れば恋し父かも  
六月のしらじら曉や玻璃ゆ透きひかりは及ぶ父のかばねに  
白あやめ汝はいのちありて手折られて死にましし父の枕辺に咲く  
むすめらの、困むわが母泣き給ふいまは極の中なる父に  
をみな身の盛りの娘らと愛でましし父よ喪服に化粧すわがら  
去りがたし鐵扉の中のみ極にはなばなと共に寐ていますもの  
海近き火葬場に吹く夏の風父亡き日ははじまらむとす  
生けるものひたに悲しも父納め火葬場出でて母いたればは  
隠亡の筈に撰られつ、わが父はみ骨となりて音たて給ふ

茂吉の「死にたまふ母」を思ひ出すと仰しやるかもしれませんが、それにも劣らないものです。その證據に傍點を附して置いた箇所をよくよんで下さい。似てゐるのは死者をかなしんでゐる歌人同士だといふ點だけです。いひかへればわたしたちに呼び起す感動が同じ性質のものだといふ點だけで

「うづまき」

——江洲のTさんに——

田中克巳

中仙道の彦根の雪ふかい一冬はわたしにとつてはじめての経験で、珍らしいといふよりは耐へがたいものでした。この苦しさをなぐさめてくだすつたのが、あなたをはじめとする詩歌の友たちでした。一月の雪晴れの日にお越し下さつたとき、ちやうど堀内民一君の「はるかなる想ひ」と一瞥にいたゞいた梁雅子さんの「うづまき」をお貸ししたことは覚えてゐますが、なんと御批評あつたかは忘れてしまひました。近ごろF君のたよりで、あなたは「やっぱり近代感覚がなければ駄目、先生のおうたは古いわ」とおっしゃつてゐるさうですが、わたしのうたは御批評どほり、申しあげることもありません。たゞ梁さんの「うづまき」ではわたしは反対の感じを持ちましたので、あからさまに云つて御批判を仰ぎたいと思ひます。

梁さん御自身の跋によると十年の歌歴をおもちになり、この歌集に收められてゐるのは主としてその後半のもの、前半に屬するものは「挽歌」「思ひ出より」「戦死」の三章だけの由です。はじめてひもどいたとき、わたしは

許されて相逢ふときを触れてみる滅衣は硬く清潔なりし

我

あなたの仰しやる近代感覚にはかうした感動はないのです。うか。例としてお示しになつたお歌には街頭で平和運動の署名を求めるから國の女の人に、ことはらないで家族全部の署名を名されるあなた？がありましたね。いや、でもなく、さうかといつて喜んでとか感動したでもなくて、ことはるよりは幾らか樂な署名の方をえらぶ少女に表はされた貴方——これが近代人だと仰しやつたのでしたやうに思ひますが、その方が父母の死を哭く人よりも近代的な感覚の持ち主だといふ意味なのでしたら、近代感覚をもつ近代人は父母の死ではどんな表情をするのでせうか。少くともその悲しみは歌はないといふのでせうか。歌ふほど強くないと仰しやるのでせうか。一度おきかせ願へればと存じます。

跋によりますと、梁さんのその外の歌は昭和二十一年以後の新しい歌ださうで、中にはひよつとしたらあなたのお好きの近代感覚の歌があるのかもしれないが、「古くさい」おたしはこゝでも「美しき伽」のお子さん方をうたはれた作「病める子」に示された同じお子さんの病氣をうたはれた作に感心しました。

夕星を仰ぎ久しきわが娘返りやがて大呼びにけり  
柿の実の朱きを持ちて食すとなき病少臥す吾子の床のひそけき  
秋さむく暮れゆく縁に立つ吾れを常臥の子がたと呼びかくる  
アンデルセンこよひも讀みて眠りゆく病長き子はまよらになりて

以上がこの二章からわたしのえらんだ四首です。第一首目の何気ないふりしたしかも構想の深さ、こゝらにはあなたの近代感覚はないでせうか。あとの三首は駄目でせうね。アンデルセンは百年近くも前に死んだ人ですものね。

この手紙はきつと雪晴れのあの日の対話以上にあなたの反対を受けると思ひます。あの日熱心な眼をしてわたしに説いて下さったやうに、お便りでお叱りをいたゞければどんなにうれしいこととせう。たゞし、わたし自身が悲歌でのみなのではないかといま書きながら反省してゐるのですから、その點ではどんなお叱りも甘受しませう。しかしニヒリズムが近代

転載歌二章

前川佐美雄

涙

酔たけておもひなやみの深まるにつかひ古したる顔よなげきぬ  
涙ながしてわれのささぐる赤き血の一滴だに君が生命のびよ  
午前十時われは足おとしのばしお空より樹々のしだれなびげば  
高きより手を斜にのべて説きをりしかの者らなべて憎まれにけり  
まぼろしは春日照る丘の孔夫子かの子らと妙に琴を弾する  
死ぬ前に何かたづけむ思ひごはかなきほのほなべて紙くづ  
緑蔭の恋語りながくつづきあればわれの記憶をたごる蟻があり  
うすガラス敷きつらね起居しをりたる危ふさも今は儚しとせず  
てのひらなあけて示せば愛なりき明るきかなや背信はなし  
その顔を七たび八たび踏みにじりこころ足りなば足る如くせよ  
くだものメロンを切りぬ冬の日のくだものなれど暗からず

作

品

其三

堀 五郎

旅愁とはかゝるものかも他人の面の翳りに曇る我が眉  
兄の家は空籬・絵本・櫛・玩具展げ放題リアリスム・ショウ  
季節向の衣服がなくて伏目勝に歩く負目を子孫にな継ぎそ  
女人よりおはぎの甘さ選ぶてふ四十の兄と話が合はぬ  
空想のとることとなりてもの云はず飯のしらせを聞き逃したり

守 谷 翠 城

くたびれて息づき居れば雨降りていのちすがしく洗ひ落せり  
いきどほりこらへかねつつ歩み來しこの巷路の砂ほこりかも  
子の性の素直ならぬを嘆かひて一日は何も手につかずをり  
長男のさわがしき性はこの我に似たるものかも叱りつつ思ふ

森 一 郎

庭樹々の葉のかけゆるゝ床の上に青い消しゴムが落ちてゐる晝  
一本のひまらや杉のかけゆるゝ体練館の壁に身を寄す  
きれぎれになつてしまつた想ひ出をかきあつめつゝふるさとに寝る  
ポマードとチックでなでた髪の毛をばら／＼にした早春の風  
人生のかたすみゝひそけくも春を迎ふる心の仕度

石 長 正 剛 男

新月の二つの角の鋭きが直らむ時をたのみて眠る  
くらげとも五体ぐつたり疲れるて新月見れば牙となる宵

感覚でいかなる感動も否定するところから、歌がはじまるの  
だと仰しやれば、もうもの分れになります。ニヒリズムの語  
のはじまりだつたツルゲネフの「父と子」の主人公の死を、  
少年のわたしはどんなに悲しんで読んだことか。どの悲しみ  
よりも深い「死」を、そして寸時——佛の語の刹那だけ、そ  
れをのがれ得たことがわたしのたゞ一つの幸せで、その幸せ  
のおかげでこんなおしゃべりもしるせることを、神も佛もお  
とがめないやうに、あなたもお願ひしておいて下さいね。

四月十二日 大阪にて

三月の雨のふる夜を起きてゐて地に鳳凰のなげくこゑきく

新 緑

梅見に来て白き梅さびし彼方には竹籬老いて日に静もれば  
おとろへてわれ何せむや雨の夜のふとき芽のぶるころの底に  
歯がぬけてかたちさへなき貌となりぬ既にいくたび涙ぐめるや  
新緑の朝なり一番に訪ひ來つるなめくぢならぬひと氣色よし  
馬鈴薯の中耕すぎて春あまわし土くろくいよよこまやかにして  
薔薇花をこよなしとしゝ二十代過ぎし日のわがあこがれに泣く  
はしたなき女よとおぼしめさすとも覚悟しをりと弱く強き恋  
新緑の朝なりたかく日の照るをまた狂亂の滅多斬りあり  
はじめより近代を憎み否み來つれば進歩なき今日のわがせい  
齡たけてわれはややく師を思ふ八十にならす老いし師を思ふ  
戦争の餓鬼がまた來る人類の血をあますなく欲る餓鬼が來る  
七十幾つのおうなにませど黒き襟にをりをり木瓜の花など映る

木樨咲く垣のある道帰るなり日暮必ず掃く子のあれば  
ちぎりたる深き安らぎあふれきて木犀の花かをるを言へり

桑 原 政 太 郎

湖の森のかげよりかつこ鳥起きよと鳴くと妻の言ふかも  
野の果て銀河かたぶく夜のほども黙ふかゝりし君をまひしぬ  
金色のひかりたばしり樹ぬれより翳り傾くときに歩めり  
くだもの、熟れし香りがぬばたまの夜を暗示す黙とならむ  
眼ぞこに草影までもありありと浮ぶことのあり父と行きし道

石 橋 幸 増

両側に工場並ぶ黒き道ひる靜かなりバス降りてゆく  
屑鉄の積み上げられた敷地にも春はいら草青く彩る  
先輩のあたたかい眼に和みつつ商談済ませて春の道帰る  
抽んでて白い建物日に光る落葉並樹の夕のひそまり

橋 本 定 芳

こもごもに見し夢の事を物語りせし妻の事ごと夢に見るかも  
みし夢のことごと吾に語りぬしが二人みし夢誰に告げなん  
いまはとて死ぬよといへる一ことの消えつ残りつ夕やみの窓  
卵色のつやある小さきこの箸は昨日夕餉に彼女がつかひし  
いたつきのやせたる指に梨もてる賢しわざかも光りて見ゆる

園 木 正

山小屋の板戸を鳴らし降り出でし風雪の夜は早く寝らな  
雷鳥の番仲良く遊びてて劍御前の朝明けにけり  
立山の影の披ごりの果にして薬師の頂は朝日に輝く

雑録

○歌會報告。○三月大阪歌會——十八日江商北濱祭にて。前川先生はじめ堀内民一、堀内小花、川部みほ、山中常光、京田千代子、片山謙二、藍川若子、岩間史子、真靖子、甲田俊子、梁雅子、科野千代子、江村峰代、難家秋良その他。會は窓外に動く春の風景の如く終始活潑明快。雜誌号を追ふにつれ、歌會回を重ねるに従つて先生の意氣加速度的に旺ん。新人旧人新陳代謝よろしく積極的参加を希望する。(難家秋良記) ○月瀬一泊吟行會——二十四日三重縣上野市まで汽車、電車。上野からバス。前川佐美雄、前川綾、見原文月、見原種、川部みほ、池田道夫、山口実、京田千代子、余江路子、岩間史子、山中常光、大西文重、中澤つる子の十四人。香雲亭旅館一泊。梅は満開、歌談は無限、深夜にいたつてやうやく就寝。翌二十五日はバスにて笠置に出づ。山口實のカメラ、月瀬観光會長、同婦人会長らの好意を受く。(中澤つる子記) 当日の詠草は別項の通り。○四月京都歌會——二十日油小路田中武彦邸。田中武彦、田中枝子、見原文月ら多数出席。眞劍にして然もなごやかに歌評歌談に半日を暮らす。今日の爲に用意せられたライラックの花を婦人らは髪に挿したりなどして名残を惜しまつ、歡會。(見原文月記)

編輯後記

前川佐美雄

△前の四月號は早く発行する筈のところ、五月月になつてやつと出たといふ有様である。理由は印刷所の轉業といふのであつた。即ち印刷所が印刷業を廃めて、他の企業に急轉換したによるので、大分進行してゐた四月号を中途で投げ出されてしまつたのである。やむなく奈良の印刷所で、又はじめから組みなほすといふ具合で、ついあのやうに遅れることになつた。印刷業も商売をやつてゐるのだから、それよりもつと儲かる商売があるなら、それに轉向するのは当然かも知れぬが、われわれにはよく解らぬ心情である、しかし轉業するまでは、日本歌人に對しては、よくやつて呉れたと感謝してゐる。  
△ただ今の奈良の印刷所は、急にこんな雜誌を持ち込まれて迷惑かも知れぬけれど、われわれの勝手な希望を快よく受け入れて以後つづけてやつてもらへることになつた。それで五月号は遅くとも五月一杯には出したいと思つてゐたが、色々の差支へが次々に出て來て、六月の中旬もむづかしいからうといふことになつた。そこで編輯同人諸君とも話つて、やむなく本号を五六月合併号としてお送りすることにした、これでもなほ遅刊は取り戻せるのでないが、七月号を七月はじめ一日発行を實現させたいと思つてゐる。

○合同歌集のこと。「夏冬集」「空の鳥」の二歌集は編輯後記々載の如く印刷所轉業のあふりや喰つて、又新しくやりなほしてゐるので、なほ暫く発行は遅れる。参加者も一人二人入れ替はりがあり、集の題も「夏冬集」の方を「懸谷」と改めた。御承知ねがたい。  
○會員消息。常田富美は四月三日富山放送局より「朱のざんげ」放送。前川佐美雄はBKより四月ラジオ歌壇放送。なほ奈良縣櫻井高校、御所高校、大滝高校、添上高校、下市中學等の校歌作詞。サンデー毎日その他数多の新開雜誌、寄稿。斎藤史は岐阜の平光善久を迎へて長野市にて歌會、三十余人出席。心の花の古参中村耕三は今回同人に参加。青森の月館れい子、鳥取の山元雪枝はそれ／＼東京に轉住。鳴上善作の母堂は三月十七日、橋本定芳夫人水葵氏は三月はじめそれ／＼逝去。遺稿は近く出版される筈。なほ橋本定芳は裏表紙広告の如く、吉川英治氏や前川佐美雄の序を得て五十九字詩と称する作品集「窓の日ざし」を出版。

○歌界消息。藝林主宰尾山篤二郎氏は今年度藝術院賞を受けられた。藝術院會員金子薫園氏は三月三十日、詩歌主宰前田夕暮氏は四月二十日相次いで逝去された。直接に間接にこれら先進からわれ／＼は甚大なる恩を受けてゐる。又、四月二十四日川上小夜子氏が急逝された。氏は本誌創刊當時同人であつた。共に哀悼に堪へない。

△以上のやうな次第だから、今度の選刊や合併号発行のことなどは、やむをえぬ事情によるものと諒解せられたい。長い間雜誌をなまけてゐたので、又出なくなるのでないかと心配せられる方もあるかも知れぬが、その点だけは今度は大丈夫である。會員全体の足並が揃ひ、氣息も合つて來たと同時に、何より私自身が積極的になりつゝあるから、先づそのやうな恐れは少しもない。たゞこの上は月末ごとに必ず歌稿を送り届けるといふことを良心的に実行して頂くといふ。八月号のメロは六月末日限りであるから、本号着次第にその用意をおねがひする。  
△見原文月歌集「雲泥」は本誌と同じ京都の印刷所から中途で投げ出されたが、このほご植方志功の装画も美しく出版された。稀に見るすぐれた家集であるから是非一本を手にせられたい、日本歌人發行所で取次ぎをする。  
△今月は梁雅子歌集「うづまき」の批評を四篇載せた。四人の筆者はいづれも本誌の同人であるが、吉村正一郎は大坂朝日天声人語の筆者、植方志功は國畫會所屬の畫家、田中克巳は詩人で學者、大阪帝塚山女子大教授である。石川信雄は云ふ必要はなからう。  
△合著歌集「高踏集」「新説」の批評は既に諸家より頂いてゐるので、次号から載せる。  
△次号からは雜誌発行のあれこれだけでなしに、もう少し高級な後記を書けるやうにした、それでないといふ私に残念である。

六、七月歌會豫告

○第十九回奈良歌會はせ時。六月二十四日(第四日曜)午後一時。奈良市坊屋敷町日本歌人發行所。歌。「悪」「青葉」各一首を半紙一杯に筆太に大書して持参のこと。判者。前川佐美雄  
○六月大阪歌會時。六月十七日(第三日曜)午後一時。江南北濱寮(東区北浜四丁目三〇)地下鐵淀屋橋南出口を東へ入り初めての辻を北へ折れて東側。  
○近作一首を西区江戸堀南通一ノ五第三江南ビル調査室片山謙二宛に前々日迄に送附  
○六月奈良歌會時。六月三十日(第五土曜)午後一時。御所高等學校南校舎。歌。一首を前々日までに御所高校北校舎内、堀五郎宛に送附。  
○六月京都歌會時。六月二十四日(第四日曜)時。油小路通り出水上る田中武彦方。歌。一首を前々日迄に田中武彦宛送附。七月の京都歌會は右田中武彦に連絡の事。  
○七月奈良歌會時。七月二十二日(第四日曜)午後一時。奈良春日神社々務所。歌。一首前々日迄に日本歌人發行所へ。  
○七月大阪歌會時。七月十五日(第三日曜)所。六月と同じ。

規約抄

・日本歌人は前川佐美雄を代表者とする。  
・日本歌人は會員と同人と維持同人とから成り、會員は一ヶ月六十円、同人は一ヶ月百円、それ／＼六ヶ月以上を納めるものとす。維持同人は内規による。  
・投稿歌数は十首以内とする。但し一首を必ず二十文字以内に楷書で認めること。締切は前々月三十日までのこと、原稿の末尾に住所、姓名を明記すること。  
・添削は十首まで百円。但し返信用切手封皮同封のこと。  
・問合せは往復ハガキ又は返信料同封のこと

日本歌人

(毎月一回一日発行) 第二巻 第五号 定價六十円・送料三元

昭和二十六年五月二十五日印刷 昭和二十六年六月一日 発行

奈良市坊屋敷町四一番地

編輯兼 前川佐美雄

奈良市般若寺町十八番地

印刷人 丸田平一

發行所

奈良市坊屋敷町四一番地

日本歌人發行所

電話大阪四七二八七番